



教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【6桁の数字「694500」その先には何がある・・・】

昨年秋、ロシアのプーチン大統領が、北方領土の帰属に関する話をしたことはご存じであろう。今号では、新学習指導要領で、子ども達の国土認識に関わる重要事項の一つとしてあげられている「北方領土問題」について取り上げてみたい。

プーチン大統領は、日米安保条約や日米地位協定を根拠に「北方領土を日本に返還した際、返還した島に米軍基地が作られるのではないか・・・」と懸念している。1960年に改正締結された「日米安全保障条約」第6条では「アメリカは米軍の日本国における施設及び区域の使用並びに日本国における米軍の地位は1952年に締結された日米安保条約に基づく行政協定に代わる別個の協定及び合意される他の取極により規律される」とある。さらに、「日米地位協定」の第3条には「米軍が基地の設定、運営、警護及び管理のため必要なすべての措置を執ることができる」とある。この事実を、日本国民である私たちはどのようにとらえたらよいのだろうか。



そこで、北方四島について、考えてみたい。歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の面積の総計は5,036km²であり、愛知県や千葉県とほぼ同じである。ところで、冒頭の六桁の数字は何を表しているかご存じだろうか。最初の三桁(694)はサハリン州の一部を示すロシアの郵便番号であり、下三桁は国後島中部にある集落(日本語名で古釜布)の郵便番号である。現在、日本国内の普通郵便(はがき)は、62円切手を貼り、七桁の番号と住所地の番地・宛名等を記載するだけで届く。

しかし、北方四島を宛先にした場合は、航空便で25g以下の定形郵便物の場合、110円分の日本の切手を貼らなければならない。さらに文字は、英語・フランス語・ロシア語のいずれかで記載しなければならない。また、日本郵便(株)が総務大臣の認可を受けて定めた「国際郵便約款(2018年5月1日に改訂)」があり、そこには「北方諸島(歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島をいいます)は、当分の間、外国とみなします。」とある。

日本は、万国郵便連合に加盟していることもあり、郵便に関して世界の決まりを守らなくてはならない事情がある。62円切手を貼って投函した場合は、料金不足として差出人に戻される。郵便上、北方四島は外国扱いなのである。

北方四島は、我が国固有の領土でありながら、国内郵便扱いされない場所である。六桁の数字(郵便番号)の先には、近くて遠い我が国固有の領土と主権があるはずである。

しかし、日米安保条約や日米地位協定の内容等から、北方領土の帰属問題に関しては、日本とロシアの二国間の問題ではなく、アメリカをも含めた内容となっている。

小・中・高の社会科・公民科では日米安保条約や地位協定の内容に関わる学習はしないが、将来、我が国を背負って立つ子ども達に、表面上の問題だけでなく、その背景にある事項もしっかり考えて判断できる力を育成していくことが重要である。それには、教師自身のたゆまぬ教材研究が必要である。

<参考・引用文献>

田村徳至、「郵便事情から領土問題を考える」社会科教育8月号、明治図書、PP.16-17、2018年8月1日発行

田村徳至(教職支援センター准教授)

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.7 繊維学部編 ～



筑波大学附属聴覚特別支援学校 中学部 教諭

石津 勝基 先生

繊維学部 化学・材料系応用化学課程 平成28年卒業



繊維学部化学・材料系応用化学課程を卒業して、千葉県にある筑波大学附属聴覚特別支援学校(聾学校)で採用となり、今年で3年目になりました。現在、中学部で中1の担任をしています。教科は理科です。本当は理科のことも書きたいのですが、せっかく聾学校に勤務しているので、この学校に来て感じたことを中心に書かせていただきます。

まず、聾学校(ろうがっこう)とは、聴覚に障害のある子供たちが通う学校のことです。私は教員経験もなく、今まで聴覚障害の方と関わったことも一度もなかったもので、不安はとても大きかったです。

初めてこの学校に来たとき、中学部の女子生徒3人から「おはようございます！」と元気よくあいさつされたのを今でもよく覚えています。「あれ、こんなに普通に話せるの？」と不思議に思いました。しかし、話していると、明瞭な発音ができるのはその3人のうち1人だけだということが分かりました。残りの2人は何を言っているのか正直よく分かりませんでした。このとき、聴覚障害の中でも、聞こえに差があり、発音の仕方も人それぞれだということを知りました。この子達ときちんと会話ができるように手話を覚えなければ…と思いました。しかし、今になって、それは半分正解で半分間違いだったように思います。私は、耳が聞こえないのだから手話を使うのが当たり前だと思っていたのですが、実際のところは少し違っていました。コミュニケーション方法は、口話であったり、指文字を使ったり、音韻サインを使ったり、手話で表したりなど、子供たちによって様々でした。手話を覚えなくてはと思ったのが半分正解で半分間違いだと感じたのは、手話で伝わる子もいれば、伝わりにくい子もいるということが分かったからです。実際、今の私のクラスではあまり手話を使っていません。手話も大切なコミュニケーション方法の一つなのですが、それよりも伝わるコミュニケーション方法が生徒一人一人にあるからです。ジェスチャーを試みたり、表情で表現してみたり、伝え方は無限大です。

私はこの3年間で、教員は子供たちとたくさん関わり、生徒一人一人のことをよく理解することがとても大切だと思いました。普通学校では一クラスの人数も多いので、なかなか難しいとは思いますが、聾学校でのきめ細やかな指導を目の当たりにして、自分も実践していく中で、普通学校でも絶対に必要なことだと感じています。その子のことを理解すれば、手立ての幅も広がっていくように思います。





茅野市立長峰中学校 理科 教諭

金山 初実 先生



繊維学部 バイオエンジニアリング課程 平成27年卒業



長野県の教員として採用となり、二年目になりました。茅野市にある長峰中学校で二年生の担任として子どもたちと関わり、日々楽しく過ごしています。長峰中学校の二年生は、七月に学年行事としてハヶ岳登山を行っています。体を動かすことがあまり得意でない私も今年度ドキドキしながら出発しましたが、クラスや学年の子どもたちに混ざって声をかけ合いながらなんとか登り、清々しい達成感と山頂からの美しい景色を味わってこれることができました。子どもたち一人一人の成長も見られ、とても良い思い出となっています。

日々の授業では理科を担当しています。長峰中学校が力を入れている「豊かな学び合い」という四人組グループで課題に取り組む学習方法について、理科の授業ではどのように生かせるのか、毎日少しずつ工夫しながら授業に臨んでいます。中学生が四人グループで学び合って追究していくには、どのような課題が良いのかな、どんな実験ができるかという良い学びになるのかなと授業について考えていくのは、ある程度時間もかかり大変に思うこともありますが、課題となる事象に出会ったときの子どもたちの驚いた顔や、科学的なきまりが分かったときの嬉しそうな顔を見るととてもやりがいを感じています。

そんな風に授業と向き合う中で、学生時代に繊維学部で学ぶことができ良かったなと思うことがあります。それは、中学生が学習する理科の内容が、今行われている研究にどう繋がっているのか、身の回りのものではどんなところに使われているのかという中学校で学習したことの先を中学生に伝えられることです。例えば、電気やエネルギーについて学習する単元のときに、繊維学部で研究されている新しい電池について紹介したり、生物の遺伝について学んだときに最近の遺伝子工学について話題にしたりといった様子です。些細なことですが、自分が繊維学部で知ったことや、学んだことを伝える中で、中学生がより科学の世界に興味をもってくれるといいなと思っています。

日々の授業に加え、部活動、生徒会、季節ごとの行事と、中学校での生活は盛りだくさんで忙しくもありますが、毎日がとても充実しています。子どもたちの姿から、教員になって良かったなと思うこともたくさんあり、幸せです。これからも子どもたちと学び、成長していけるように頑張っていきたいと思っています。



教職支援センター10~12月の動き

長野県総合教育センターと教職実践演習との協働でカリキュラム研修講座(10/1, 3, 5)
 教職支援センター拡大打ち合わせ会議(10/2.12/18)、伊那地区教職実践演習授業参観
 (10/10)、長野地区教職実践演習授業参観(10/15.16)、教員免許更新支援センター会議
 (10/23)、教育学部附属松本学校園との協議(11/1)、教員免許状更新講習に関する長野県教育委員会と県内関係者打ち合わせ会(11/2)、教員免許更新支援センター運営委員会(11/13)、
 長野市教育委員会と連携協議会(11/26)、長野県総合教育センターとの理科指導法反省会
 (11/30)、教職支援センター運営委員会(12/3)、教職教育委員会学芸員養成課程実施部会
 (12/3)、農学部と近隣教育委員会・協力校等と教育実習等にかかわる懇談会(12/12)





地域連携プロジェクト 連携パートナーからのメッセージ



【授業支援ボランティア 3年目進行中！】

学生さんが一人加わるだけで、毎度が新年度の授業開始のような真新しい空気が生まれます。学生さんも緊張されているし、生徒達も緊張と期待が入り混じる状態になります。指導教員としても、学生さんが授業に入りやすい状況を演出するべく授業展開も工夫し新しい形の授業を生み出そうと努力するようになりました。

複数の学生さんが支援に入ってくれる場合は、自然とアクティブラーニングの要素が増え、生徒も進んで自らペンを握り「できた」「解けた」と笑顔が絶えない授業になりました。さらに、楽しくわかる授業以上に「どーして？」「なぜ」と疑問を抱く生徒が増えてきました。今までの集団学習の中でそのような質問や疑問は声に発することができなかつたり、すぐ投げ出してしまった生徒も、学生一人あたりに4・5人程度の生徒を任せる環境作りによって、時には学生さんを困らせる質問をしたり、両者が一緒になって考える光景が見られました。

数学に対する嫌悪感を強く抱いている生徒に、「濃度問題」や「は・じ・きの問題」の説明には必ず苦勞しています。しかし、学生さんが生徒に寄りそうだけで、わからないところを見出し一緒に解いて喜んでくれるので、嫌々感も減っています。

ある生徒は「小1から今まで算数が大嫌いだったが、「なんぼ」って聞いてくる方の教え方がわかりやすく、生まれて初めて数学が楽しいと思った」と言い、今まで20点以上のテストを取ったことがなかったのに、なんぼ？先生に教わった結果、期末考査で80点をとり、信じられないと言って泣いていました。

私なりに授業に対する研究・研修を定期的にしてきましたが、学生の皆さんと共に授業を行って学生さんのサポートで授業のバリエーションや発展の幅が増えたと感じます。指導教員として1時間の授業を演出し多くの疑問を抱かせる授業に進化させていきたいと感じています。

座学は教員主導で一方通行の授業になり集中力に欠ける生徒がでます。学生さんが後方支援で生徒に寄りそってもらえるお陰で、1時間の授業で必ず達成感を持てる状況を作り上げられています。

今後学生さんにとってのWinを拡げること、他の教科で活用すること等を工夫しながら、より充実して継続するよう努力したいと思いますので、よろしく願いいたします。



(エクセラン高等学校教諭 吉見繁憲)

★前号の訂正箇所のお知らせ★

前号の教職支援センターニュースレター(2018年秋号・第11号)の巻頭言に下記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

本文6行目:「特別支援学級」⇒「特別支援学校」



編集後記

新しい一年が始まりました。教職支援センターでは、来年度の時間割の調整や、学生対象の教職セミナーの準備が始まっています。2019年も充実した授業やイベントを提供できるよう、教職支援センター一同、工夫を凝らしていきたいと思っています。今年もどうぞよろしく願いいたします。(広報担当 河野桃子)

